中学生広島平和教育研修

「私たちが未来を考えていく」

富士見中学校２年
小林（こばやし） みさと

悲惨な戦争を二度と繰り返してはいけない。

一九四五年八月六日午前八時十五分、雲一つない広島に原爆は落とされた。すさまじい爆風、三千度～四千度の熱線、放射線により一瞬で広島の街並み、多くの人々の当たり前の生活が消えた。皮膚が垂れ下がった人々、血で染まった川、家族を探す子供の姿。七十四年前、広島に落とされた原子爆弾で、何万人、いや何十万人の人々が犠牲になった。この事実に私たちはどう向き合っていくべきだろう。

私は今回、原爆にあった広島に訪れとても貴重な体験をさせていただいた。

当時まだ七歳だったTさんは、爆心地からおよそ一・五㎞のところにある寺の中で被爆した。被爆後、斜めになった柱をのぼって外に出たのだが、まだ小さかったTさんは砂ぼこりで前方が見えない状態だったという。逃げる最中に見たものは川に浮く死体、体が赤黒くなりハエがたかっている人、水を求める人…。想像するだけでも悲惨さが伝わってきた。だが、そんな中、少しでも余裕のある人たちが協力し、夕方にはおにぎりが広島に配給されていたという。そのことに私は驚いた。人々のあきらめない気持ちや協力する心が徐々に広島を復興させたと気付いた。

家を失い、六人もの親せきを亡くしたTさんが話のまとめに、「原爆は、身も心もボロボロにしてしまう。」と言っていた。その言葉に私は、強く心を打たれた。本などを見て原爆の恐ろしさは知っていたが、実際に被害にあったTさんの言葉で、自分の考えの甘さを知った。多くの建物が壊され家族も見つからない。私だったら生きていく事が苦しくなり、全てを投げ出したくなるだろう。

Tさんからの私たちへの願いは、「今はインターネットなど便利なものがある。それを使って原爆の恐ろしさを世界に発信していってほしい。」という事だった。被爆者の人数が減っている今、私たちが戦争や原爆について知り、後世に伝えていくべきではないだろうか。広島市長が話していたように、一人の人間の力は小さく弱くても、多くの人の力を結集すれば実現することがあるのだ。

この世界から核兵器を無くそう。もう二度とこんな悲劇が起こらないためにも。広島や長崎が核兵器の恐ろしさを伝える中、世界では核をめぐり厳しい状況が続いている。そんな中、私たちに何ができるだろうか。日本の政府には、核の恐ろしさを充分に分かってもらい、核兵器禁止条約に日本も参加してほしい。そして七十四年前の人々の主張を尊重してほしい。私も、被爆者の声に耳を傾け、世界に発信し、被爆者の声を届けていきたい。同じ事が起きないために。

戦争をよく知らない私たちは、相手の国にされたことだけを知って全てを知った気にならず、日本が相手の国にしてしまったことを知った上でこの戦争について考え、受け止め、そして未来に伝えていく。被爆者の思いに私たちの思いをのせて、戦争を知らない人々に伝えていきたい。

未来の平和を考え、笑顔が絶えないそんな世界になる事を私は願っている。

広告